



Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_

2019-09-01

夏と秋が交差してー調布市郷土博物館など



Navigation

[Previous 月](#)

[Next 月](#)

[Today](#)

[Archives](#)

[Admin Area](#)

Categories

[All](#)

[General](#)

灰皿町の本

●[幻想小説『なめくじキーホルダー』 清水鱗造](#)

●[「週刊読書人」詩時評 一九九二-一九九三年 清水鱗造批評集 第一分冊](#)

Search

もう九月、秋とっていいのだろう。八月下旬から風が変わった。うか、暑さのなかにも涼しさのようなものが感じられるようになった。数日雨が続き、その後、急に秋が来たような感じだった。

幾分過ぎやすくなってきたなあと思いつつ、終わりゆく夏にいを感じてしまう。

春、夏は好きな季節なのだ。世界がはじまり、盛り上がり、いて。それが春と夏。秋はおわりのはじまり、冬は、どこか暗いものう。ねむっているような、はじまりを待っているような。それがお

なのかもしれない。

もっとも、夏の暑さをきついなあと感じてはいるのだが。この夏と夏的な暑さが短かったからかもしれない。身体が夏に慣れる前にきた。その猛暑がだらだら続くなあと思ったら秋の風が。

うちの近くの田んぼを再現した公園を通ると、稲穂が垂れており葉があり、すっかり秋の気配で、驚いた。なのに夏の暑さ、蝉時雨、ンゼミだっただろう。秋と夏が混在していた。



Login

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

ログイン

Powered by



それに、すこし前にサギ草を展示していたお寺ではもうコスモス汗ばみながら、ここにも秋を感じていた。

そんな八月の下旬のある日、うちから割と近いところに調布市郷と知ったので出かけてきた。

多摩川にほど近いところにある。駅でいうと京王多摩川が最寄り、ムセンターなどがあるので、よく出かけていたのだが、こちら側はぎるだけで、知らなかった。車で行ったのだが、わかりにくい。と止が多く、博物館は目の前にあるのに、行くことができないのが、た。ぐるりと遠回りしてやっと入る。

昭和四九（一九七四）年に開館したという。建物が落ち着いて、調布市のある武蔵野台地、多摩川周辺には、縄文時代の遺跡も多数で聞いたので、常設にあるであろうそれを目当てに行った。



常設は二階。一階では企画展をやっていた。そして入口すぐのと長近藤勇の座象と、閲覧スペースに新選組関係の書物。そうだったが生誕地だったのだ。当時の武蔵国多摩郡上石原村辻（甲州街道上方）、現在の調布市野水。

先走ってしまうが、二階の常設に、近藤勇生家の宮川家のジオラマあった。屋敷の広さは七千平方メートル、広い庭の中に母屋に数種模型からも豪農だったことがうかがえる。

パンフレットなどには、近藤勇のことはあまり載っていないから一階の閲覧コーナーなど）はもしかして、大河ドラマ（二〇〇四年組！））かなにかの後に展示されるようになったのかもしれない。

と、近藤勇に思わず食らいついでしまったのは、小学生の頃から土方歳三が好きだったから。

そうだった、多摩川、浅川（多摩川の支流）という名前は、かつりの川として、特別の語感として響いたものだった.....。

今、多摩川のわりと近くに住んでいて、買い物途中などに眺めり、そのことをほとんど忘れていたのだが。とはいっても、車で橋摩川の流れにほかの川以上の何かを感じていたのは、もしかすると心奥からしみ出してきていたからかもしれない。

土方歳三の生まれたのは武蔵国多摩郡石田村（今の日野市石田）でいえば、調布よりももっと上流にあたるのだけれど。

話が脱線した。

調布市郷土博物館へ戻ろう。

企画展では「お米にまつわる調布ものがたり」（九月一日まで）た。多摩川の氾濫などがあつたり、湧水もあり、水分が多い土地で

は適さないので、そこでの工夫の紹介があった。深田で、「泥っ田い。田んぼの上に丸太を浮かべその上に足を載せて苗を植えたり、を履いて沈まないようにして稲を刈り取ったり、田舟という、刈り舟を作ったり。

この調布市郷土資料館の周田もかつては田んぼだったという写真た。

そして、お目当ての二階の常設展示室へ、

武蔵野台地に人が住み始めたのは約三万年の旧石器時代で、縄文では、特に縄文中期（約五千年前）のもの、原山遺跡や飛田給遺跡い。さらに晩期のもので、下布田遺跡など。

原山遺跡にほど近い北浦遺跡出土の「縄文土器深鉢・勝坂式」（前三〇〇〇年前）。先日、町田市民文学館ことばらんどで、覚えた徴である「動物や植物をモチーフにした」もので、鎌首をもたげた飾が土器の中央から口縁にかけて施されたものが印象に残った。

原山遺跡出土の人面装飾付彩文有孔罍付土器（縄文中期・紀元前の土器の胴部下のほうにある土偶のような人の顔の意匠……。用途太鼓として使ったとか、酒造りに使われたのかも、とあった、

ヘビのような、人の顔のような……。この“ような”というところは惹きつけられるのかもしれない。この謎に、おそらく大切ななっている。それは連綿と今につづくものであろう。わたしとかれらる。

ほかに怖いような小さな土偶たち（原山遺跡出土）、土製耳飾（土）の精緻な模様に見入った。







庭に出てみると、かつて川にかかっていた石橋と庚申塔があったのはわたしは実はよく知らない。近くにあった記憶がほとんどない博物館とかで見るだけのものになってしまっている。そのことをすう。

出かけてから一週間が経つ。もう九月に入った。うちの近くの田しづつ色に変化している。あと少しすると収穫なのだろう。気の早花が咲いているのも見た。基本的に彼岸のあたりに咲くはずなののおなじヒガンバナ科のキツネノカミソリを見たばかりだった。こち中などで咲く。もう終わってしまったかなと、林の中をはいっていつあったが、一本だけ見つけることができ、うれしく思ったのだ残。キツネノカミソリとヒガンバナ。夏と秋が交差している。



17:38:42 - umikyon - No comments